

地域がん登録データを活用した胃内視鏡検診の 生存率に関する検討

岸本 拓治* 尾崎 米厚 西田 道弘 岡本 幹三 濱島 ちさと

1. 目的

2006年に公表された胃がん検診ガイドラインでは、死亡率減少効果が証明された胃X線検査が推奨され、胃内視鏡検査は証拠が不十分とされた。現在、鳥取県において症例・対照研究による胃内視鏡検査の死亡率減少効果に関して検討中であるが、今回は、胃内視鏡検診の有効性の傍証を評価することを目的に、胃がん罹患者を対象に胃X線検査受診者と胃内視鏡検査受診者の生存率を比較検討したので報告する。

2. 対象と方法

対象は、2000年4月1日から2007年12月31日までの胃がん罹患者のうち診断時年齢が40歳から79歳の1,666名である。対象者は、鳥取県地域がん登録データから抽出した。胃がんの診断日を観察期間の開始日とし、死亡日あるいは2007年12月31日を観察期間の終了日とした。診断日以前の1年以内の検診受診状況により胃内視鏡検診、胃X線検診、未受診の3群に区分した。統計解析方法としてKaplan-Meier法、Cox回帰分析法を実施した。

3. 結果

累積生存率は胃内視鏡検診が最も高く、続いて胃X線検診、最も低いのは未受診であった。この違いは、Log Rankテスト($p<0.001$)で有意な差と認められた。胃内

視鏡検診に対する胃X線検診と未受診の死亡に関するハザード比は、それぞれ1.626 ($p<0.125$)、5.254 ($p<0.001$)であった。

4. 結論

胃内視鏡検査は未受診に比べて、統計的に有意に高い生存率を示した。しかし、内視鏡検査受診者と未受診者の生存率を比較する場合には、Self-selection bias, Length bias, Lead-time biasなどの影響を除外できない。一方、内視鏡検査と胃X線検査の比較では、各種のbiasの影響は少ないと思われる。胃内視鏡検診の方が高い生存率の傾向を示したが、統計的に有意な差ではなかった。生存率が高い傾向を示した理由は、胃がん罹患者の内視鏡検査における早期がんの割合が高かった結果と関連していると思われる。これらの結果は、死亡率減少効果が検証されている胃X線検査と同程度またはより高い生存率を示した胃内視鏡検査は、胃がんのより早期な発見による検診の有効性の可能性を示唆していると思われる。

*鳥取大学医学部環境予防医学分野
〒683-8503 米子市西町 86
